

文語の苑

メールマガジン第十九号（平成二十五年一月）

夢日記

平成二十四年十二月二十七日

夢に墜落中の機内にあり。前に傾く操縦席にてパイロットの、下界を睨みつつ腕を伸ばし親指にて何物かを押へつけんとするが如く、*POW, POW, POW* と唱ふるを見る。

一年以上も前に、同じく夢の中にて上空よりプールの中のシンクロ泳法を見るが如く四人の人の頭を中心にして十字を成し右回りに回転しつつロウ、ロウ、ロウと唱ふるを見き。夢のうちはこのこと思出で、余の符合を不思議に思ひぬ。二つの夢の視覚的要素は全く異なるも音声的要素は相等し。この精神現象の裏に何事かあらむと思ひめぐらす内に夢の世界より現つに戻りぬ。

再び眠りに入りて更に夢に入る。海外在留の子弟にやあらむ。英語、日本語の入り混じりたる作文を余に示す。町長とあるべきを朝長と、会長とあるべきを海長と記したり。それを指摘するに音に違ひは無かるべきにと応ふ。漢字は音のみならず意味をも有するなり、音変らずとも意味異なれば誤りとせざるべからずと諭す。徒に煩しきことをなすものかなと不服げなり。余説きて曰く、一見煩しきことなれども一度この操作に習熟せば効率良きことこの上なし、しかもその習熟にはさほど労を要せずと。この応接の内に再び夢より覚め、この度は起き出でて机に向ひこの記録をなす。

愛甲次郎

文語の苑

メールマガジン第十九号

小倉百人一首 十七 平兼盛

忍ぶれど色にいでにけり我が戀は ものや思ふと人の問ふまで

醍醐・村上と併稱せられたお二人の天皇の、延喜・天曆の盛世は、後の時代の宮廷の人たちにとって、哀惜と憧憬の念を以て思ひ(い)起される時代でした。「王朝」の復活を念じられた南北朝の南朝の二帝の諡(おくりな)が、後醍醐天皇、後村上天皇とされたのはその証左(しよ)でせう。中でも村上天皇の「天曆の御時」、天徳四年彌生三月の大つこもりの日に催された歌合せは、稀代の盛儀だったらしい。當時の曆で言へ(え)ばこの日は春の最後の、逝く春を惜しむ日ですが、今であれば春酣(たけなわ)、今年では五月九日に當ります。主催なさる天皇は、君王としての統率力と豊かな文学の素養を兼備された三十五才の若き帝王。内裏清涼殿に居並ぶのは、美々しく着飾った文武百官と女御、更衣、女官方です。宮殿の別棟には、「方人(かとうど)」と呼ばれ、それぞれ更衣の方を頭とする左右各々二十人の歌の詠み手たちが控へ(え)てを(お)ります。そこには、百人一首に歌が収録された歌人では、ここに取上げる二人のほか、藤原朝忠や大中臣能宣の顔が見えます。四十人のうち女性は十二人、前に擧げた伊勢の娘、中務もその一人です。申の刻(今の午後四時ころ)に天皇が臨御されて宴が始まり、酒と肴が清涼殿に列席する人たちの間を巡ります。やがて日が暮れると室内は燈火が灯され、庭にはあかあかと篝火が焚かれる…。

左右の方人たちは、「霞、鶯、柳、…」と進む二十の歌の題に従って歌を詠み、進上致します。詠進された歌を讀上げるのは講師(こうじ)、勝ち、負け、或いは「持」つまり引分けの、判定を下すのは、判者。この日判者を務めたのは、藤家嫡流、人臣筆頭の左大臣の位にある藤原實頼でした。寛仁大度の大政治家ですが、和歌には必ずしも通曉してを(お)りません。歌合せは着々と進行し、いよいよ最後の「戀」の部の五つの題に入ります。その一つ「忍ぶ戀」のところ、二つの何れ劣らぬ名歌が詠進されました。右方が平兼盛のこの歌、左方が次の十八に掲げる壬生忠見の歌、「戀すてふ我が名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひ初めしか」です。判者の實頼は何れとも決しかね、「持」にせざるを得ないかと考へ(え)ます。所が皇上の傍らにゐ(い)た殿上人から、皇上が「しのぶれど…」と吟じて居られると聞く。そこで實頼は、直ちにこの歌を勝ちとします。皇上が自分などよりはるかに深い和歌の素養をお持ちであることを、よく知って居たからでした。衣冠正しく控室に控へ(え)てゐ(い)た平兼盛は、勝ちを知ると満面の笑みを浮かべ、他の勝負の結果を待たずに踊るや(よ)うな足取りで退出したと傳へ(え)られます。やがて歌合せが終り、宮中では殿上人たちがこの日の盛儀を思起こしながら、「王朝の春」の絵巻さながらに、沈々と更ける春夜の宴を楽しんだことは言ふ(う)までもありません。この「天徳の歌合せ」の模様は長く人々の記憶に残り、その後の宮中の歌合せの模範となりました。

作者の平兼盛は、光孝天皇四代の孫、若いころは兼盛王と呼ばれましたが、後に臣籍に降下して平氏を名乗りました。官位は五位の地方官に過ぎませんでした。歌人として名を成し、三十六歌仙の一人です。離婚した妻が身ごもったまま再婚して生れた子が、「栄花物語」の作者に擬せられる赤染衛門だったと言(は)れます。

文語の苑

メールマガジン第十九号

もろこし人も住みつくや

愛國百人一首を讀む（十五）（平成二十五年一月二十一日）

あふぎ來てもろこし人も住みつくやげに日の本の光なるらむ

三條西實隆

我が國には、あの漢土の人達も永住してゐるが、やはり憧れて來たのであらうか、いやまさにこれが我が日の本の國の神髓なのだなあ。

「住みつくや」の「や」はこの場合係助詞としての文末用法と見るべきで、句末の「らむ」と結んで、漢土の人達が日本に永住する理由は「あふぎ來る」即ち憧憬の念なのであらうかとの問ひに、その理由こそ當に日の本の國の光であると推量してゐるのです。これだけなら何の變哲もないと思はれますが、詠者三條西實隆が康正元年（一四五五）に生れ、天文六年（一五三七）八十二歳で歿するまでの間は、室町幕府の末期から戰國時代にかゝり、平和で住み易い状態からは遠かつたことを考慮に入れる必要があります。そのやうな時代に漢土から日本に憧れて永住する人がゐることに、實隆は今更のやうに日本國の神髓に觸れたのです。

その神髓とは何か、それは例へばこの時代、應仁の亂の最中、東山文化が開花してゆくなど、戰亂の中にも、平時の嗜みを忘れない日本獨特の文化でありませう。平忠度が戰陣に趨くに當り、藤原俊成に和歌を托すなど、何時の時代にも、かうした例は枚擧に違もなく、現代でも東日本大震災の被災者の方々の平常心が世界の賞贊の的となつたことに繋がつてゐます。

戰國時代、戰が絶えることはありませんでしたが、それにも拘らず日本人は渡來した漢土の人達を温く迎へたのです。このやうな心情を育む文化こそが我が國の光だと實隆は詠ふのです。この氣持は前大戰で漸く戦局が暗轉し始めた中で、愛國百人一首の編纂を續けた撰者達の氣持にも共通してゐたに違ひありません。

室町時代の代表的歌人として、二十一代集の最後となる新續古今集の眞名序及び假名序を書いた一條兼良の歌學、古典學は宗祇に受繼がれ、これが古今傳授といふ形を通して實隆に傳へられます。實隆は更に二條流歌學をも繼承して、三條西家歌學の祖となり歌人として大成し、また六十年に亘る日記「實隆公記」は貴重な史料となつてゐます。

實隆のもう一つの業績は歴史書や古典の校訂に力を盡くたことです。藤原定家といひ、實隆といひ、當代一流の歌人達による古典文書の校定の御蔭で、現代の私達は大きな恩恵に浴してゐます。時恰も源氏物語が初めて歴史的文献に登場した日に因んで十一月一日（紫式部日記寛弘五年（一〇〇八）條）が古典の日に制定されました。古典に親しむと同時にこれら先人の寫本校勘に感謝の念を捧げたいと思ひます。

市川浩

文語の苑

メールマガジン第十九号

文語歌曲「拔刀隊の歌」と「數へ歌」

古今集の假名序では、歌の様を六種にわけ、その二番目に「かぞへ歌」を置いてあるほど、「一つ」から始まる數へ歌は古いものですが、それだけに多くの變遷を経て、様々な歌詞が、曲が生れました。室町時代の『御伽草子』にも見られるさうですが、江戸時代になって今に残る數へ歌の祖形が作られ、民謡としてうたはれ、子供には手鞠をつく時の遊び歌としてうたはれました。音楽學者の安田寛奈良教育大教授によると、幕末には「庶民の數へ歌」と「土族の數へ歌」二つの系譜ができ、それが明治に引繼がれると共に、解禁となつた基督教のカトリックとプロテスタントの二つの系譜に、あるいは「民權數へ歌」と「教化數へ歌」の系譜に受繼がれていつたさうです。詩形に特徴があり、當然それにつれて旋律も異なつてゐます。

ここにとりあげる「數へ歌・一番はじめは一の宮」は、古來からの和語である「ひとつ、ふたつ」でなく、漢數字を使ったものですが、明治時代から最近に至るまでよく歌はれ、この正月にもラジオから聞えてきました。ただ、「十(とを)」は東京招魂社(今の靖國神社)とされてゐたものが「十は東京三重橋」と替へて歌つてゐました。この數へ歌、旋律は軍歌を取入れたもので、そこに明治初期の時代を感じさせます。

その軍歌の原題は「拔刀隊の歌」、作詞は外山正一東京大學教授で、明治十五年に井上哲次郎らと新しい詩の形をつくらうとして出版した『新體詩抄』に採り入れられてゐます。外山は、南北戦争が終つて數年後の明治三年から數年アメリカに滞在し、アメリカの軍歌に惹かれます。そして佛蘭西の國歌その他、西歐では戦争の折に激烈なる歌をうたふことで士氣を鼓舞してゐたことを知ります。歸國の翌年、日本では西南戦争が起り、熊本の田原坂では、鹿兒島兵の拔刀隊が活躍しての激戦が繰りひろげられました。刀の使ひ方も知らない平民の多い政府軍が反撃のために募集した拔刀隊には、戊辰戦争で涙を呑んだ鹿兒島を仇とする元會津藩士も多く、「戊辰の復讐」と叫びながら切込んで行つたことは、後に總理大臣にもなつた犬養毅が報道して有名になつた話です。その田原坂を外山は、歐米の軍歌を意識して新形式の詩に作りました。「敵の大將たる者は古今無雙の英雄」西郷隆盛で、それが今度は「朝敵」になつたのです。

この新體詩を使つて作曲したのが、『新體詩抄』上梓の二年後に、佛蘭西軍事顧問として日本にやつて來たシャルル・ルルーです。ルルーは日本の陸軍軍樂隊に基礎的な教育を施して、西洋音樂の技術を向上させ、來日の翌年に、鹿鳴館でこの「拔刀隊の歌」を發表しました。そしてこの歌が基となつて「陸軍分列行進曲」が作曲されて公式なものとして採用され、現在に至るまで自衛隊や警察の公式行進曲として受繼がれてゐるといふ息の長い音樂となりました。ルルーは軍樂隊以外にも、音樂取調係の伊澤修二や、君が代の作曲者エッケルト等と「日本音樂會」を作つて指揮をしたり、雅樂などの日本音樂を研究したり作曲したりしてゐます。

佛蘭西の軍人が軍歌として作曲し、「土族」の登場する、壯絶ともいへるこの歌が、「庶民の數へ歌」に變貌したのは、そのメロディーが行進曲へと變つて行けるリズムックなところがあるからではないでせうか。

そこで思ひ出されたのが、「ピョソコ節」です。信頼できる音樂書で此の語が使はれてゐるのは藍川由美さんの本だけだとされてゐますが、『これでいいのかにっぽんのうた』を讀んだときは、知らない單語だらけの中で、この「ピョソコ節」だけがわかつた氣がしたものです。「われわれは民族の美感和傳統とは無關係の音樂を、替へ歌といふ方法で受け容れることができたのであらう。」といはれることの典型がこの「拔刀隊の歌」から「手鞠歌」への變換ではないでせうか。ルルーは歸國後、日本の古典音樂に関する著作を出しながらも、日本人には音樂はわからないと言つてゐたさうですが、それは西歐音樂理解のことで、日本人は替へ歌で自分の音樂へと引きつけてゐたのだと言へないでせうか。

文語の苑

メールマガジン第十九号

この二つの歌、いづれかの歌がうたへれば、もう片方も歌へるので、上下に並べてみました。

【抜刀隊の歌】

我は官軍我敵は
天地容れざる朝敵ぞ
敵の大將たる者は
古今無雙の英雄で
之に従ふ兵は
共に慄慄決死の士
鬼神に恥ぬ勇あるも
天の許さぬ叛逆を
起しゝ者は昔より
榮えし例あらざるぞ
敵の亡ぶる夫迄は
進めや進め諸共に
玉ちる劔抜き連れて
死ぬる覺悟で進むべし

【手鞠歌】

一番はじめは一の宮
二は日光の東照宮
三は讃岐の金比羅さん
四は信濃の善光寺
五つ出雲の大社
六つ村々鎮守様
七つ成田の不動様
八つやはたの八幡宮
九つ高野の弘法さん
十は東京招魂社
(以下は、徳富蘆花の「不如歸」からとつた付足しの口語文な
ので略します)

谷田貝常夫

文語の苑

メールマガジン第十九号

「あぶ」「いぶ動詞語尾

古代日本語には、動詞の語幹から母音を取り去った形に、*bu*を付けて時間的持續を表はす造語法がありました

「くふ(食)」「はもともとは」「儼み付く」の意味でした。その語幹から母音を取り去った形 *kuf-u*・*u*・*afu* を付けるのが *kufafu* となり、「くはぶ」。口語では、これが「くは入る(啜)」「となりませう。(古代の八行子音は *h*・*h*・*h*・*h*)

「儼み付く」が時間的に持續すると「啜入る」になるのは納得の行く所です。

「あし」は現代語では「あてる(當・宛)」です。

「の」「あつ」に右の作業を施すと、「あたぶ」になり、それが口語では「あた入る(與)」。

たとへば、食物を人に押し當ててある状態を想像してください。それを取り返さずに、持續的永久的に押し當てる「與入る」ことにはなるのではないでせうか。

「おす(押)」「と」「おさぶ・おさ入る(抑)」「ひく(引)」「と」「ひかぶ・ひか入る(控)」「の關係も同斷」「とる(取)」「と」「とらぶ・とら入る(捉)」「も間違ひないでせう。

なるほどと思はれるのが、「たたく(叩)」。これに同じ作業を施すと「たたかぶ(戰)」になります。人を叩いてある状態が持續すると「戦ぶ」ことになります。

ちよつと私の獨斷が過ぎるかなといふ心配もありますが、「わる(割)」「から」「わらぶ(笑)」「が出て來たのではないでせうか。

笑ふときには、唇が割れて歯が見える。その「割る」から「わらぶ」が生まれたやうに思はれるのです。なほ、口語では、他動詞は「割る」、自動詞は「割れる」ですが、文語ではどちらも「割る」です。ただし、他動詞は四段活用、自動詞は下二段活用です。

「わらぶ」の元になった「割る」は自動詞。口語でいへば「割れる」の方でせう。

もつと想像を逞しくしてみませう。

「うつ(打)」「から」「うたぶ(歌)」「が出て來た可能性もあるでせう。

手拍子を打つて首頭を取つてゐる行爲が「歌」に結びついたのではないかと思ふのです。

「ひく」「と」「つかぶ」「はぶひくせひ。

古代の日本語では、清音と濁音は同じ音の變種と理解されておましたから、「つく」「が」「つかぶ」になり、「うかぶ(浮)」「に進化したと考へられます。

清音と濁音の牆壁を取り払ふと、「さびに」「賜」の意味の「たぶ」が「たまぶ」になったのかと思はれて來ます。「*q*・*h*」は「ど」の國の言葉でも、相ひ通じる所がありますから、不思議はありません。「たばぶ」から「たまぶ」が生まれたのでせう。平家物語で那須與一が「あの扇の眞中、射させたばせたまへ」と祈願してゐるのも *h*・*h*・*h*・*h* になりませう。

萬葉集を見ると、もつと面白い動詞が見られます。

「あまふ」「はにひりりしてゐる状態ですが、これが「あむ」に「あぶ」をつけた形であることは間違ひありません。

文語の苑

メールマガジン第十九号

「霧」が出ることを「きる」と言ひ、その連用形が「きり」といふ名詞に變つたのですが、「この」「きる」から、「きらぶ」といふ動詞が出来ました。「霧のかかつてゐる状態が持續してゐる」ことを表はします。

「もみぢ(紅葉)」の語源を探求すると、「揉み出(い)し」に遡ります。布に染色するとき「手で揉んで、色を揉み出す」ことから生まれた言葉です。「もみい(い)」自動詞(が)「もみづ」「になりました。

「ごじ」と同じ「二」段活用になるはずなのに、「ごじい」わけか上代には四段活用、平安以降は上二段活用です。

その間の事情は不明ですが、語源が「揉み出(い)し」だといふ定説が間違つてゐるのではないかと主張する人もあります。

四段活用なら連用形は「もみぢ」であり、それが名詞になつたのが「紅葉」です。

「ご」もみ(みmidu)の最後の母音を取つて「あぶ」を(い)ける(い) mimid+afuで「もみだぶ」になります。紅葉になるといふ「變化」を表す動詞は「もみづ」。それに對して、紅葉の状態が持續してゐる様子を「もみだぶ」と言ひのです。清音で「もみたぶ」といふことが多かつたやうです。

「あまぶ」「きらぶ」「もみたぶ」は「エモウ」「キロウ」「モミトウ」と發音して下さい。萬葉時代には本當に「wemafu(ウエマフ) kirafu momitafu」と讀んでゐたのですが。

燈火の陰に耀ふ現身の妹が笑ひし 面影に見ゆ
あき たのほへ 秋の田の穂の上に 霧ふ朝霞いづへの方に我が戀ひまむ
ちせおのね は 百船の泊(は)つる 對馬の浅茅山時雨の雨にもみたひにけり

最後の歌は、朝鮮へ渡る使節が、對馬中央部の浅茅灣(あさふ)山は「あさぢ」、灣は「あさふ」に入つて行き、山が色づいてゐることに氣づいて歌つたもの。入港してみるとすでに紅葉が綺麗だつたのですから、「もみづ」といふ變化する様子を見ることは出来ませんでした。

入港した初めから紅葉してゐたのですから、「もみたぶ」なのです。「もみたぶ」は「モミトウ」ですが、連用形の「もみたひ」は「モミタイ」と讀んで下さい。

他に、この造語法でできたと思はれる動詞を並べてみます。

左が元の形。中が「も」を付けた形。右がその口語。

かく(掻・早)	かかぶ(抱)	かかへる
える(撰)	えらぶ(撰)	
さる(去・離)	さらぶ(撰・浚)	
つかむ(取)	つかまぶ(捕まぶ)	つまかへる
かたる(語)	かたらぶ(談)	
なぞる	なぞらぶ	

高田友

文語の苑

メールマガジン第十九号

牧野伸顕日記（中央公論社、一九九〇年刊）

牧野伸顕（一八六一生一九四九没）は大久保利通の次男にして吉田茂元首相の義父なり。十一歳にして岩倉使節団に参加し、米國留學（費府中学）を経て、大学校を中退後、外交官となり倫敦に赴任す。福井県・茨城県知事を経て文部次官に任ぜらる。更に墺太利大使、伊太利大使を務めたる後、外務大臣、農商務大臣、枢密顧問官を歴任す。

その後、さらに宮内大臣、内大臣を務めて摂政時代以後の昭和天皇を補弼す。

一八六〇年代生まれは人材の宝庫にて、六十年生まれの三宅雪嶺、六十二年生まれの新渡戸稲造、六十二年生まれの徳富蘇峰と巨人揃ひなるが、牧野は其の中にも主流中の主流とこそ言ふべけれ。

浩瀚なる本日記は、宮内大臣に就任したる大正の頃より内大臣時代のもまでを包含し、巻を擱くこと能はざる興味深き内容なり。歴史的資料としての価値も第一級と覚ゆ。

たとへば、張作霖爆死事件に際し、昭和天皇に対し前言を翻したる田中義一首相への厳しき姿勢や、根回しをしたるにも拘らず前言を撤回せし西園寺公への失望振りなど印象的。

『西公（西園寺公望）を訪ひ、首相の言上果して予想の如く聖明を蔽ひ奉る内容なるに於ては、兼て御思召通りの御言葉を被仰るゝも止むを得ざるべく、從而其影響等も覚悟せざる可からず、又其内容予測に相違する場合は御保留、御下問等の事も拝察し得る次第なるを以て、此の辺に付今日重ねて談合したり。』

然るに本件に付先きに承知したる事とは相違し、御言葉の点に付明治天皇御時代より未だ曾て其例なく、総理大臣の進退に直接関係すべしとして反対の意向を主張せられ、余りの意外に茫然自失の思をなし、驚愕を禁ずる能はず。』（昭和四年六月二十五日付け日記より）

土屋博

文語の苑

メールマガジン第十九号

「文語の苑」活動余談

文化施設職員の勤務態度

「文語の苑」の運動を進めていくには公共施設等とのタイアップが有効です。シンポジウムや文語教室を開催するのに、場所を借りたりPRをお願いしたりするのです。

いろいろの文化施設や 記念館、 文学館などをお願いに上がりました。それら施設の事務方のうち事業や企画を担当する人にお目にかかることになりました。専任の職員の時もありますし、区役所の生涯教育関係等の仕事と兼任している方の時もあります。

対応の仕方は千差万別ですが、来意を告げると普通は好意的に迎えてくれます。一般にこれら施設は、市民に何らかの文化を楽しんでもらうこと及びその水準が向上することを目的としており、分野は違っても「文語の苑」の目指すところと概ね同じ方向を向いているからだと思われます。勿論、それぞれの施設や団体に固有の方針があり、細かな点では「文語の苑」と同じではありません。しかし、同じような目的を持ち、資金不足など同じような壁にぶつかり、同じように悩んでいる、ということが何となくわかり、仲間意識が生ずるからでしょう。

しかし、中にはこれはどうかなと思うような態度に出会うこともあります。「自分たちは のお墨付きを持つ由緒ある団体だ。あなたが属するような任意の集団とは格が違う」とか「多忙なのだ。新しい話に係り合う暇はない」というような対応をする職員が稀にいます。

文化施設の職員だから文化好き(?)であるべきとは言えないのかも知れませんが。単に仕事として資料整理などルーティンワークや上層部が決めたイベントを大過なくこなしていけば良いという考え方もあるでしょう。とは言え、どのような組織で働くにしろその組織の目的を理解し、自分の心をそれに沿わせることは大人として当然のことと思います。民間の会社であれば愛社精神のようなものでしょうか。自分の言動が会社のファンを逃がすことに繋がるとしたら残念なことだ、会社の名前を汚さないようにしよう、というような心持ちでいたら、来訪者に失礼な態度を取らないのではないのでしょうか。

勿論、想像に過ぎませんが、失礼な態度の職員がいる施設では事務局全体として組織目的の理解が薄く、「愛社精神」が乏しいのだろうと思います。例えば、自分達が早く帰宅するため利用者を時間通りに帰らせる案をタネに職員間で茶飲み話をしている、というような図を頭に描いてしまいます。実際、客がいるにも拘らず定刻通りに電燈を消してしまう施設がありました。

何故、このようなことになるのか。私は職場に厳しさが足りない、管理者が甘い、と思います。特に、公益法人などの形態を取る施設では、事務局員の採用やその訓練が行き届いていないようです。理事長など組織の長が専任でなく、理事の互選で決めていることの悪い効果なのでしょう。その結果、立派な建物を持ち、一見重要な公共活動をしているようでも現実には、不心得な職員によって利用者、来訪者の不評を買い、設立時の理想や組織の目的から遠くなくなってしまっている施設が意外に多いのではないのでしょうか。勿体無いことです。民間会社のように利益で業績を測ることができないので、職員の管理や勤務評定には難しい点もあるでしょう。しかし、組織トップ層は、親しい人に抜き打ち訪問してもらった等の手法でも使い、職員の働きぶりの実態を見るべきです。

同様の施設である公共図書館については対照的な印象があります。私は東京の5つの区と横浜市の図書館カードを持っており、頻繁に利用しています。いずれも、利用者への対応がスピーディかつ丁寧であることに感心させられます。指定業者に管理委託したり、アルバイトやボランティアを利用している例もあるようですが、いつ行っても何処の図書館でも不愉快な思いをしたことはありません。

ある図書館に「文語の苑」のタイアップをお願いに行った時にも、今は、共同で出来ることは無い。ご健闘を祈る「旨のことを残念そうに言われました。やはり、自分達は文化活動をしているということをお頭に置きながら、日常の仕事をしておられるのだと、頼もしく思いました。